

大学生における本来性と共感性の関連

三輪 由貴¹ 名取 洋典² 林 洋一²

要 約

伊藤 (2010) は自分らしさへのこだわりによって共感性が失われる可能性を指摘している。ところで本来性を捉える尺度には、感覚面を捉える本来感尺度 (伊藤・小玉, 2005) と、行動面を捉える本来性目録 (Kernis & Goldman, 2006) が存在する。そこで本研究では、本来性の感覚的側面と行動的側面の双方を取り上げ、本来性のどのような側面が共感性と関係しているのかを検討した。その結果、共感性が特に低い群の本来性は、自分の気持ちを優先して関係性の中で自己を捉えることが少ないという特徴を有しており、この群が伊藤の指摘する「自分らしさにこだわる」人々の特性である可能性が示された。さらに、本来性の高い人は、共感性が低いのではなく、認知的なアプローチを利用することで相手の気持ちを理解し、共感していることが明らかとなった。

本来性を多面的にとらえた本調査によって、本来性と共感性とが単純な関係にあるのではなく、本来性のパターンによって共感性の特徴も異なることを明らかにすることができた。

キーワード : 本来性 本来感 共感性

問題と目的

「ありのまま」「素のままの自分」や「本当の自分」「自分らしさ」という言葉で一般的に表わされるものと重なる概念に本来性があげられる。実存哲学における本来性 (Eigentlichkeit) について仲正 (2015) は、「本来的と形容しているのは、メディアによって制御される公共的な『世界』とは異なる、特定の理想の“世界”のことではなく、自らにとっての実存の諸可能性を見極め“主体的”に決断して選びとれる体制にあることではないか、と考えられている」と指摘している。この実存的

哲学における本来性の体験的基盤は Gendlin の Felt-sift によって明らかにされている。つまり、Felt-sense が志向しているものに気づき、手に入れた時にピタリとくる感覚、これが本来性的体験である。

本来性 (Authenticity) は、近年、ポジティブ心理学で「文脈によって変動しないことや防衛的でない最良の自尊感情」(Optimal self-esteem, Kernis, 2003)、「非搾取的な対人関係において自由で深く自分自身でいられる能力など、人間のよりポジティブな心理的性質や資源」(伊藤・小玉, 2005) として、注目されている。そして、本来性

を感情的側面から捉えた概念が、本来感 (Sense of Authenticity) である (伊藤・阿部, 2007)。本来感は「自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚の程度」(伊藤・小玉, 2005) と定義される。本来性の内的・外的な行動面を測定する尺度には、本来性目録 (Kernis & Goldman, 2006) がある。本来性目録は、「気づき」「歪みのない処理」「行動」「関係」の4つの下位尺度からなる。伊藤・阿部 (2007) は、本来感との間に正の相関関係があることを示した(下位尺度の順に、.51、.24、.46、.30)。本来感と「気づき」の関連は比較的強く、「歪みのない処理」とは比較的弱い関連を示している。この結果について、伊藤・阿部 (2007) は「気づきが感情水準での本来性であり、概念レベルとして、本来感の感覚水準に近いからである」と考察している。

本研究では、伊藤・阿部 (2007) の研究を追検討する。また、自分らしさへのこだわりによって共感性が失われる可能性が指摘されている(伊藤, 2010) ことから、本来性と共感性の関連を検討する。

日本における本来性の研究は、本来性の感情的側面を捉えた本来感尺度 (伊藤・小玉, 2005) の作成を皮切りに、本来感と様々な概念との関連が検討されてきた。しかし、本来性の行動的側面からアプローチをしている研究は未だ少ない。そこで本研究では、行動的側面からも本来性と共感性との関連を明らかにしたい。

方 法

参加者

東北地方の私立大学1校 (以下 A 大学) と関西の私立女子大学1校 (以下 B 女子大学) を対象に調査を実施した。

A 大学の調査参加者は、男性 67 名 (平均年齢 19.90 歳、 $SD=1.30$) と女性 70 名 (平均年齢 20.28 歳、 $SD=3.40$) の合計 137 名 (平均年齢 20.10

歳、 $SD=2.61$) である。B 女子大学の調査参加者は、79 名 (平均年齢 20.79 歳、 $SD=0.75$) である。調査参加者は全員で 216 名 (平均年齢 20.36、 $SD=2.14$) である。

調査時期

2015 年 9 月中旬から 10 月中旬に実施した。

調査内容

表紙に、調査の目的、諸注意、筆頭研究者のメールアドレスを明記し、調査参加者の年齢、学科、学年、性別の記入を求めた。使用した尺度は、以下の通りである。

1. 本来感尺度

伊藤・小玉 (2005) が作成した尺度であり、7 項目から成る。著者に使用許可を得て、原版通りに使用した。原版に準拠し、5 件法 (1.まったくあてはまらない、2.あてはまらない、3.どちらでもない、4.あてはまる、5.かなりあてはまる) で回答を求めた。

2. 本来性目録

Kernis & Goldman (2006) が作成した The Authenticity Inventory の日本語版である。伊藤・阿部 (2007) により翻訳された。著者の Kernis と伊藤に使用許可を得て、原版通り使用した。本尺度は、「気づき (12 項目)」「歪みのない処理 (10 項目)」「行動 (11 項目)」「関係 (12 項目)」の4つの下位尺度から成り、全 45 項目である。原版に準拠し、5 件法 (1.全く当てはまらない、2.あてはまらない、3.どちらでもない、4.あてはまる、5.かなりあてはまる) で回答を求めた。

3. 共感性尺度

鈴木・木野 (2008) によって作成された多次元共感性尺度 (MES) を使用した。本尺度は、「被影響性 (5 項目)」「他者指向的反応 (5 項目)」「想像性 (5 項目)」「視点取得 (5 項目)」「自己指向的反応 (4 項目)」の 5 下位尺度、全 24 項目から成る。原版に準拠し、5 件法 (1.全くあてはまらない、2.あまりあてはまらない、3.どちらともいえない、4.ややあてはまる、5.とてもよくあては

まる)で回答を求めた。

手続き

質問紙法による調査を授業時間内に実施した。調査に関する諸注意を伝えた後、調査用紙を配布した。配布された参加者から順次回答をしてもらい、回答が終わった参加者からその場で回答を提出してもらった。表題は「大学生の意識調査」とした。なお、口頭で匿名性が保証されている事、研究以外でデータを使用しない事を伝えた。

結果

本来性目録と本来感の関係の検討

本来感と本来性目録をあわせて本来性尺度を構成し、52項目すべてを対象として因子分析(最尤法・Oblimin回転)を行った。その結果、5因子

を抽出した。負荷量が.29以下の項目や2因子以上に.30以上の負荷量を示した項目を除いて因子分析を繰り返した。最終的な結果をTable1に示す。

第1因子は本来感尺度に含まれていた「これが自分だ、と実感できるものがある」や「いつでも揺るがない「自分」をもっている」に加え、「自分の行動の背後にある自分自身の信念や価値観を、よくわかっている」や「自分の芯、または本当の自分にとって重要な部分と、そうでない部分を区別することができる」など、本来性目録における“気づき”に含まれていた項目が比較的高い負荷量を示したことから“気づき”とした。

第2因子は「親しくしている人に、自分が本当はどんな人間かわかってもらいたい」や「親しく

Table1 本来性尺度因子分析結果 (最尤法, Oblimin回転, N=216)

項目内容	F1	F2	F3	F4	F5
34. 自分の行動の背後にある自分自身の信念や価値観を、よくわかっている	.737	.030	-.800	.150	.007
22. これが自分だ、と実感できるものがある	.705	.228	-.101	.063	-.020
19. 自分の芯、または本当の自分にとって重要な部分と、そうでない部分を区別することができる	.663	-.024	.057	-.064	.079
17. いつでも揺るがない「自分」をもっている	.626	-.101	.204	.036	-.129
28. 良くもわるくも、自分がどんな人間なのかに気づいている	.611	-.044	-.049	-.149	.072
21. 自分がとる行動の理由について、しっかり理解している	.496	.079	.016	-.033	-.057
23. 他人にどう言われようとも、自分の価値観に基づいた行動をするようにしている	.475	-.044	.291	.008	-.058
37. 自分のする行動のほとんどは、自分の価値観に基づいている	.470	.060	.127	.127	.031
35. 自分の信念をつらぬくことで誰かに批判されても、それは仕方ないと思う	.424	-.038	.029	-.145	-.087
43. 自分の行動の理由や望んでいることに、だいたいは気づいている	.421	.115	.091	-.107	-.039
51. たいいてい行動は、自分が必要とし望んでいることに基づいている	.351	.189	.065	-.069	-.069
16. 親しくしている人に、私が本当はどんな人間かわかってもらえることを大切にしている	.104	.744	.102	-.040	-.071
32. 親しくしている人には、外に見せている仮面やイメージではなく、本当の自分をわかってほしい	-.038	.738	-.058	-.016	-.018
7. 親しくしている人には、自分の弱い部分をわかってもらいたい	.013	.665	.031	-.045	.168
2. 親しい人には、その人をどれだけ思いやっているか伝えるようにしている	.029	.568	-.025	.051	.049
15. 親しくしている人には、自分の強い部分をわかってもらいたい	.045	.512	.122	-.060	-.034
33. 私がどんな人間なのか、親しくしている人は正確に理解しているだろう	-.159	.428	-.136	.213	-.164
6. 人前でもありのままの自分が出る	-.135	.098	.804	.135	-.037
10. いつも自分らしくいられる	.086	-.008	.772	-.006	.031
11. 自分のやりたいことをやることができる	.258	-.025	.569	-.115	.014
14. どんなときも、親しくしている人は私があるままでのまできると信じられるだろう	.109	.192	.345	-.080	.044
39. 自分には重要でなくとも、他人にはとても重要であれば、その目標のために多大な労力を使う	-.021	.137	.332	-.160	-.165
* 3. 本当は楽しくないのに、楽しいふりをすることがよくある	-.026	.045	-.003	.759	-.013
* 27. 他人をがっかりさせないために、自分がしたくないことをすることがよくある	.118	-.131	.001	.512	.114
* 20. 内心では賛同しかねるときも、黙ったりうなずいて、相手に賛同していることを伝える	-.116	-.100	-.057	.482	.075
* 18. 他人と自分を比べて落ち込むことが多い	.192	-.271	.206	.454	-.037
50. 他人の目を気にして「うその顔」をすることはほとんどない	-.027	.113	.185	.412	-.229
* 36. 人生で何を達成したいのか、自分でも疑問に思うことがよくある	.139	-.109	.187	.409	.066
* 8. 私が内心で思っていることを知ったら、親しくしている人は驚きショックをうけるだろう	-.108	.018	.165	.340	-.116
* 52. 自分に対する不快な感情は、できるだけ見ないようにしている	.032	-.020	-.015	.010	.704
* 26. 誰かが自分の欠点を指摘したら、それを考えないようにして、すぐに忘れるようにする	-.045	.073	.063	.027	.703
* 49. 自分をきびしく振り返ることは、とてもむずかしいことだ	.092	-.064	.104	-.042	.408
* 24. 自分のなかの暗い考えや気持ちは無視するようにしている	-.123	-.035	-.068	-.109	.371
* 29. 冷静に自分の限界や欠点を考えるよりは、何も考えずいい気分を待たい	.125	.030	-.068	.271	.327
* 45. 親しくしている人と意見が一致しなかったら、建設的に解決するよりは、その話題を無視するだろう	-.106	.231	.016	.104	.303
	F1(気づき)				
	F2(関係)	.195			
	F3(自己尊重)	.370	.197		
	F4(気持ちにあった行動)	.072	-.112	.294	
	F5(歪みのない処理)	-.080	.023	-.150	.088

注) *印は逆転項目を示す。分析に際しては、逆転項目の処理を行ってから因子分析を行った。

Table2 各変数のPearsonの積率相関係数 (N=216)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 本来性総得点	—											
2. 気づき	.78 **	—										
3. 関係	.61 **	.34 **	—									
4. 自他尊重	.71 **	.47 **	.38 **	—								
5. 気持ちにあった行動	.44 **	.15 *	-.07	.28 **	—							
6. 歪みのない処理	.40 **	.15 *	.15 *	.08	-.04	—						
7. 共感性総得点	.22 **	.14 *	.45 **	.11	-.34 **	.32 **	—					
8. 被影響性	-.30 **	-.37 **	.15 *	-.23 **	-.35 **	-.02	.51 **	—				
9. 他者指向的反応	.43 **	.30 **	.43 **	.32 **	-.09	.33 **	.57 **	.10	—			
10. 想像性	.18 **	.14 *	.28 **	.05	-.13	.16 *	.61 **	.01	.07	—		
11. 視点取得	.45 **	.35 **	.29 **	.31 **	-.02	.41 **	.61 **	-.03	.52 **	.27 **	—	
12. 自己指向的反応	-.07	.03	.16 *	-.10	-.41 **	.07	.60 **	.35 **	-.03	.41 **	.08	—

* $p < .05$, ** $p < .01$

している人には、外に見せている仮面やイメージではなく、本当の自分をわかってほしい」「親しくしている人には、自分の弱い部分をわかってもらいたい」など、本来性目録における関係の項目が高い負荷量を示したため、“関係”とした。

第3因子は本来感尺度に含まれていた「人前でもありのままの自分が出せる」や「いつも自分らしくいられる」「自分のやりたいことをやることができる」に加えて、「どんなときも、親しくしている人は私がありのままであると信じられるだろう」「自分には重要でなくとも、他人にはとても重要であれば、その目標のために多大な労力を使う」が高い負荷量を示したことから“自他尊重”とした。

第4因子は「本当は楽しくないのに、楽しいふりをすることがよくある」や「他人をがっかりさせないために、自分がしたくないことをすることがよくある」「内心では賛同しかねるときも、黙ったりうなずいて、相手に賛同していることを伝える」などの項目で高い負荷量を示されたため、先行研究(藤元・吉良, 2014)に習って“気持ちにあった行動”とした。

第5因子は「自分に対する不快な感情は、できるだけ見ないようにしている」「誰かが自分の欠点を指摘したら、それを考えないようにして、すぐに忘れるようにする」「自分をきびしく振り返ることは、とてもむずかしいことだ」など本来性目録における歪みのない処理の項目が高い負荷量を示したため、“歪みのない処理”とした。

なお、各因子ごとに.30以上の負荷量を示した項目の得点を合計し、項目数で除して下位尺度得点を算出した。

本来性と共感性の関連

共感性尺度は、原版通りに下位尺度を構成し、合計得点を項目数で除して得点を算出した。本来性総得点と共感性総得点 ($r=.22$, $p=.001$) および想像性 ($r=.18$, $p=.008$) に有意な低い正の相関がみられ、他者指向的反応 ($r=.43$, $p<.001$) および視点取得 ($r=.45$, $p<.001$) に有意な中程度の正の関連がみられた。一方で、被影響性とは、有意な弱い負の関連 ($r=-.30$, $p<.001$) がみられた。

気づきと共感性総得点 ($r=.14$, $p=.041$) および想像性 ($r=.14$, $p=.036$) に有意な弱い正の関連がみられ、他者指向的反応 ($r=.30$, $p<.001$) および視点取得 ($r=.35$, $p<.001$) に弱い正の相関がみられた。一方、被影響性とは有意な弱い負の関連 ($r=-.37$, $p<.001$) がみられた。

関係は、被影響性 ($r=.15$, $p=.031$) と自己指向的反応 ($r=.16$, $p=.025$) に有意な弱い正の関連を示し、想像性 ($r=.28$, $p<.001$) と視点取得 ($r=.29$, $p<.001$) に有意な弱い正の関連を示した。また、共感性総得点 ($r=.45$, $p<.001$) と他者指向性 ($r=.43$, $p<.001$) とは、有意な中程度の正の関連がみられた。

自他尊重は、他者指向的反応 ($r=.32$, $p<.001$) と視点取得 ($r=.31$, $p<.001$) で有意な弱い正の

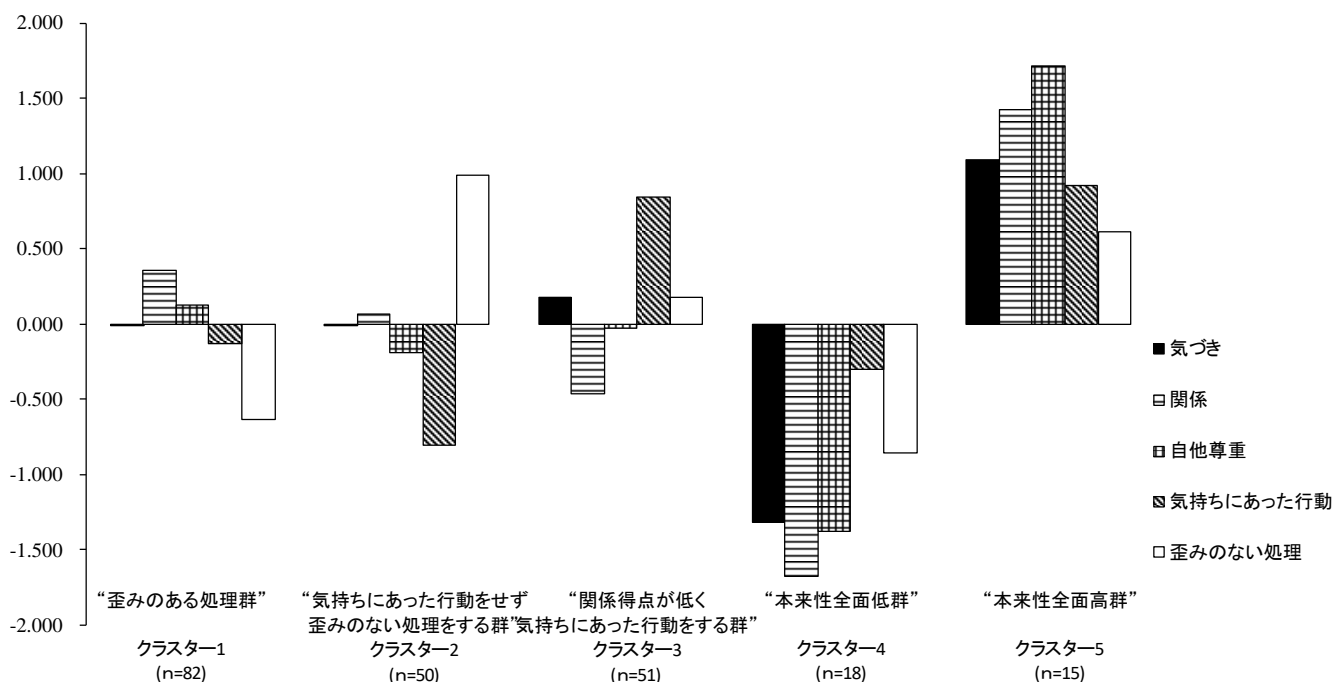


Figure1 本来性尺度得点のパターン

関連がみられた。また、被影響性とは有意な弱い負の関連を示した ($r=-.23, p<.001$)。

気持ちにあった行動と共感性総得点 ($r=-.34, p<.001$) および被影響性 ($r=-.35, p<.001$) に有意な弱い負の関連がみられた。また、自己指向的反応 ($r=-.41, p<.001$) とは有意な中程度の負の関連がみられた。

歪みのない処理は、想像性と有意な弱い正の関連がみられた ($r=.16, p=.021$)。また、共感性総得点 ($r=.32, p<.001$) および他者指向的反応 ($r=.33, p<.001$) と有意な弱い正の関連がみられ、視点取得とは有意な中程度の正の関連がみられた ($r=.41, p<.001$) (Table2)。

本来性尺度得点のパターン

複数の本来性の要素により個人の本来性のあり方を“本来性パターン”として記述することは、現実在即したより妥当な本来性の理解をもたらすと考えられる。個人が実際にどのような本来性パターンを有しているかを明確にするため、クラスタ分析を行った。

ユークリッド距離により距離を算出し、ウォード法によってクラスタ分析をした。

クラスタ分析の結果、5クラスタの結果が最も解釈可能であったため、これを採用した (Figure1)。

クラスタ1 ($n=82, 38\%$) は、歪みのない処理得点が低く、関係得点が高い群である。クラスタ2 ($n=50, 23\%$) は、気持ちにあった行動得点が低く、歪みのない処理得点が高い群である。クラスタ3 ($n=51, 24\%$) は、気持ちにあった行動得点が高く、関係得点が低い群である。クラスタ4 ($n=18, 8\%$) は、全面的に本来性が低い群である。クラスタ5 ($n=15, 7\%$) は、全面的に本来性が高い群である。

本来性尺度の得点パターンと共感性得点

本来性尺度の得点パターンの違いによる各尺度における平均値差を検定した (Table3)。一元配置分散分析の結果、すべての下位尺度において有意な主効果がみられた。効果量は、多次元共感性尺度、他者指向的反応、視点取得で大きく、想像

Table3 本来性尺度の得点パターンによる各尺度における平均値差の比較 (N=216)

本来性パターン	歪みのある処理群(C1)	気持ちにあった行動をせず歪みのない処理をする群(C2)	関係得点が低く気持ちにあった行動をする群(C3)	本来性全面低群(C4)	本来性全面高群(C5)	分散分析 効果量(η^2) 下位検定
	N = 82 Mean (SD) 95% CI	N = 50 Mean (SD) 95% CI	N = 51 Mean (SD) 95% CI	N = 18 Mean (SD) 95% CI	N = 15 Mean (SD) 95% CI	
1 多次元共感性尺度	3.583 (.352) 3.506 - 3.659	3.735 (.380) 3.630 - 3.840	3.341 (.334) 3.249 - 3.432	3.107 (.670) 2.798 - 3.417	3.629 (.446) 3.404 - 3.855	F(4,211) =11.981 ** .227 C4<C3<C1<C2,C5
2 被影響性	3.339 (.731) 3.181 - 3.497	3.368 (.847) 3.133 - 3.603	2.871 (.662) 2.689 - 3.052	3.278 (.603) 2.999 - 3.556	2.733 (.993) 2.231 - 3.236	F(4,211) =5.207 ** .099 C5,C3<C1,C2
3 他者指向的反応	3.663 (.669) 3.519 - 3.808	3.912 (.658) 3.730 - 4.094	3.604 (.619) 3.434 - 3.774	2.811 (.784) 2.449 - 3.173	4.093 (.744) 3.717 - 4.470	F(4,211) =10.639 ** .202 C4<C3,C1<C2,C5
4 想像性	3.683 (.629) 3.547 - 3.819	3.720 (.868) 3.480 - 3.960	3.341 (.709) 3.147 - 3.536	3.233 (.956) 2.792 - 3.675	3.947 (.795) 3.545 - 4.349	F(4,211) =3.969 ** .075 C4,C3<C1,C2,C5
5 視点取得	3.534 (.629) 3.398 - 3.670	3.804 (.537) 3.655 - 3.953	3.565 (.562) 3.410 - 3.719	2.889 (.868) 2.488 - 3.290	4.067 (.516) 3.805 - 4.328	F(4,211) =9.969 ** .189 C4<C1,C3,C2,C5 C1<C2,C5 C3<C5
6 自己指向的反応	3.717 (.658) 3.574 - 3.859	3.900 (.723) 3.700 - 4.100	3.314 (.659) 3.133 - 3.495	3.375 (1.407) 2.725 - 4.025	3.217 (1.008) 2.706 - 3.727	F(4,211) =5.224 ** .099 C5,C3<C1 C5,C3,C4<C2

CI: Confidence Interval
* $p < .05$, ** $p < .01$

性、自己指向的反応で中程度を示した。多重比較の結果、被影響性においては、“本来性全面高群”が低い平均値を示し、“気持ちにあった行動をせず歪みのない処理をする群”が比較的高い値を示した。他者指向的反応と想像性、視点取得では、“本来性全面低群”が低い値を示し、“本来性全面高群”が高い値を示した。自己指向的反応においては、“本来性全面高群”が最も低い値を示し、“歪みのある処理群”、“気持ちにあった行動をせず歪みのない処理をする群”が比較的高い値を示した。

考 察

本来性目録と本来感の関係の検討

伊藤・阿部(2007)は、Kernis & Goldman(2006)の The Authenticity Inventory を翻訳し(本来性目録)、本来感との関連を検討している。本来性目録の下位尺度のうち、自分の感情に気づいていることを測定している「気づき」と本来感が最も高い相関係数を示した。この要因について、伊藤・阿部(2007)は、本来感が全般的な感覚を示す指標であるという点で「気づき」と概念的位置づけが一致していること、「気づき」が感情水準に最も近いことを示している。

一方で、藤元(2014)や藤元・吉良(2014)は、本来性目録が Kernis & Goldman(2006)が作成した通りの理論的な因子構造にならないことを示している。藤元・吉良(2014)では、「気づき」「自己対峙」「気持ちに合った行動」「アイデンティティの確立」「行動」が抽出された。また、藤元(2014)では、本来性目録(44項目)と対人関係性尺度(11項目)、自己肯定意識尺度(2項目)に対して因子分析を行った結果、「ありのままの自己(6項目)」「他者受容(6項目)」「否定的側面への対峙(7項目)」「自己理解(6項目)」「自己保持(5項目)」が抽出されている。

本研究では、「気づき」「関係」「自尊尊重」「気持ちにあった行動」「歪みのない処理」を因子として抽出した。「気づき」と本来感尺度のいくつかの項目が同一の因子に同程度の負荷量を示していることから、「気づき」と「本来感」の概念的位置づけが近似していることが確認できた。本研究における「気づき」のうち特に「自分の行動の理由や望んでいることに、だいたい気づいている」「自分の行動の背後にある自分自身の信念や価値観を、よくわかっている」「自分の芯、または本当の自分にとって重要な部分と、そうでない部分を区別す

ることができる」「たいていの行動は、自分が必要とし望んでいるに基づいている」は、藤元 (2014)における「自己理解」、藤元・吉良 (2014)における「気づき」因子に高い負荷量を示した項目である。Kernis & Goldman (2006) および伊藤・阿部 (2007) で「気づき」を構成していた項目のうち、上述の項目は「気づき」を測定する項目として、特に適切な項目であるといえよう。

また、本研究における「歪みのない処理」因子に高い負荷量を示した項目のうち特に「自分に対する不快な感情は、できるだけ見ないようにしている」「誰かが自分の欠点を指摘したら、それを考えないようにして、すぐに忘れるようにする」「冷静に自分の限界や欠点を考えるよりは、何も考えずいい気分でいたい」「親しくしている人と意見が一致しなかったら、建設的に解決するよりは、その話題を無視するだろう」は、藤元・吉良 (2014) で「自己対峙」因子に、藤元 (2014) の「否定的側面への対峙」に高い負荷量を示した項目である。これらの項目のうち、Kernis & Goldman (2006) および伊藤・阿部 (2007) で「歪みのない処理」を構成していた項目は、「自分に対する不快な感情は、できるだけ見ないようにしている」「誰かが自分の欠点を指摘したら、それを考えないようにして、すぐに忘れるようにする」「冷静に自分の限界や欠点を考えるよりは、何も考えずいい気分でいたい」であり、「親しくしている人と意見が一致しなかったら、建設的に解決するよりは、その話題を無視するだろう」は「関係」を項目する項目であることから、以上の4つが「歪みのない処理」の測定に特に適切な項目だと考えられる。

さらに、本研究における「気持ちにあった行動」因子に高い負荷量を示した項目のうち特に「本当は楽しくないのに、楽しいふりをすることがよくある (逆転項目)」「他人をがっかりさせないために、自分がしたくないことをすることがよくある (逆転項目)」「内心では賛同しかねるときも、黙ったりうなずいて、相手に賛同していることを伝え

る (逆転項目)」「他人の目を気にして『うその顔』をすることはほとんどない」「私が内心で思っていることを知ったら、親しくしている人は驚きショックを受けるだろう (逆転項目)」は、藤元・吉良 (2014) で「気持ちにあった行動」因子に高い負荷量を示している。上述の項目のうち「本当は楽しくないのに、楽しいふりをすることがよくある (逆転項目)」「他人をがっかりさせないために、自分がしたくないことをすることがよくある (逆転項目)」「内心では賛同しかねるときも、黙ったりうなずいて、相手に賛同していることを伝える (逆転項目)」「他人の目を気にして『うその顔』をすることはほとんどない」は、Kernis (2006) および伊藤・阿部 (2007) で「行動」を構成する項目であり、「私が内心で思っていることを知ったら、親しくしている人は驚きショックを受けるだろう」は、「関係」を構成する項目である。このように、この4つの項目が特に「行動」の測定に適した項目と考える。

本来性目録は、日本では米国と同様の因子構造をとらないことから信頼性の問題が指摘されている。しかし、項目レベルでは、安定してある因子に同程度の負荷量を示す項目が存在することが分かった。

本調査で「自他尊重」因子が抽出されている。この因子に高い負荷量を示した項目は、本来感尺度を構成していた「人前でもありのままの自分が出せる」「いつも自分らしくいられる」「自分のやりたいことをやることができる」と、本来性目録における「関係」に高い負荷量を示していた「どんなときも、親しくしている人は私がありのままであると信じられるだろう」、同目録の「行動」逆転項目である「自分には重要でなくとも、他人にはとても重要であれば、その目標のために多大な労力を使う」である。特筆すべきなのは、「自分には重要でなくとも、他人にはとても重要であれば、その目標のために多大な労力を使う」が本調査では逆転項目にならなかった点だろう。日本を含む

アジア圏においては、他者と互いに結び付いた人間関係の一部として自己をとらえる協調的自己感が一般的である（高田，1999）。一方で、自己を他者から分離した独自な実体ととらえる相互独立的自己感は西欧とりわけ北米中産階級に典型的である（高田，1999）。このような文化的自己観が反映されたのではないだろうか。

本来性と共感性の関連

本研究で共感性を測定するために用いた尺度には、認知的側面として他者指向的な「視点取得」と自己指向的な「想像性」、情動的側面として他者指向的所産である「他者指向的反応」と自己指向的所産である「自己指向的反応」、並行的所産である「被影響性」からなる。

「視点取得」は、自発的に他者の心理的視点を取ろうとする傾向を、「想像性」は架空の自分の感情や行動に投影する傾向を測定している。「他者指向的反応」は、他者に対する同情や配慮など他者への共感的配慮を、「自己指向的反応」は、他者の苦しむ場面における不安や不快など自己の個人的苦痛を、「被影響性」は対象の感情をそのままに再生し、他者の心理状況に対する素質的な巻き込まれやすさを測定している。

これらのうち本来性総得点と関連があったのは、「被影響性」「他者指向的反応」「想像性」「視点取得」であり、「他者指向的反応」「想像性」「視点取得」とは正の関連があった一方、「被影響性」とは負の関連があった。このことから、本来性が高い人ほど、他者の心理的視点を認知面で能動的に取ろうとし、「悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる」や「人が頑張っているのを見たり聞いたりすると、自分には関係なくとも応援したくなる」といった他者に対する配慮など他者指向的な反応をする傾向がある一方、「まわりの人がそうだといえば、自分もそうだと思えてくる」「物事を、周りの人の影響を受けず自分ひとりで決めるのが苦手だ」といった、他者の心理状況に巻き込まれる経験が少ないことが分かった。

本来性の下位尺度である「気づき」や「歪みのない処理」でも同様に「被影響性」とは負の相関係数を「他者指向的反応」「想像性」「視点取得」とは正の相関係数を示した。つまり、動機、感情、欲望などの様々な側面に気づき、信頼している人や自分の内的経験や外側からの評価情報を否認せず、歪めず、誇張せず、無視せずに受け止めることができる人ほど、共感的経験をしているといえるだろう。

しかし、本来性尺度における「気持ちにあった行動」と共感性の下位尺度の相関係数は、負の値を示した。言い換えれば「本当は楽しくないのに楽しいふりをすることがある」「他人をがっかりさせないために、自分がしたくないことをすることがある」といった行動をとる人ほど共感性が高いことが示された。特に、「気持ちに合った行動」は、「被影響性」と「自己指向的反応」との間に有意な負の影響が見られた。他者の感情に巻き込まれやすく、「他人の失敗する姿をみると、自分はそうなりたくない」「苦しい立場に追い込まれた人を見ると、それが自分の身に起こったことでなくてよかったと心の中で思う」といった他者の苦しむ場面における不安や不快など自己指向的反応をみせる人ほど、「本当は楽しくないのに楽しいふりをする」と「内心では賛同しかねる時も、黙ったりうなずいて、相手に賛同していることを伝えたりする」経験が多いことが分かった。自分の気持ちにあった行動をとるよりも他者に望ましい行動をとってしまう傾向にあるのではないだろうか。

本来性パターンと共感性

被影響性は、“本来性全面高群”が低い値を示し、“気持ちにあった行動をせず歪みのない処理をする群”が高い値を示した。全般的に本来性が高い人は、他者からの影響を受けにくく単に他者の情動が感染するような共感的様相を体験することが少ないことが考えられる。一方、“気持ちにあった行動をせず歪みのない処理をする群”は、他者の

情動をそのまま再生するような共感的体験を多くしていることが示唆された。被影響性は、他者の心理状態に対する素質的な巻き込まれやすさを測定している。気持ちにあった行動をせず歪みのない処理をする群は、他者の感情に巻き込まれやすい素質を比較的強くもっている可能性がある。

他者指向的反応は、“本来性全面高群”が高い値を示し、“本来性全面低群”が低い値を示した。「悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる」というような共感的配慮を本来性が高い人が行う一方で、本来性が低い人は、そうした感情体験や配慮をすることが比較的少ないことが伺える。

想像性も“本来性全面高群”が比較的高い得点を示し、“本来性全面低群”が低い値を示した。本来性が高い人たちは、架空の自分の感情や行動に自分を投影して想像し、思考することを、本来性が低い人に比べ行っている可能性が示唆された。

視点取得は、“本来性全面高群”が高い値を示し、“本来性全面低群”が低い値を示した。本来性の高い人は、「自分と違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのかをわかってもらう」「人と対立しても、相手の立場に立つ努力をする」といったような自発的に他者の心理的観点を取ろうとする傾向が強いことが示唆された。一方、本来性の低い人は、自発的に他者の心理的観点を取ろうとする傾向が比較的低いことが想定できる。

自己指向的反応は、“本来性全面高群”が低い値をとり、“気持ちにあった行動をせず歪みのない処理をする群”が高い値をとった。“気持ちにあった行動をせず歪みのない処理をする群”は「他者の失敗をする姿をみると、自分はそうなりたくないと思う」といった他者の苦しむ場面において個人的な不安や苦痛などを体験する傾向が、全般的に本来性が高い人よりも強いことが示唆された。

まとめ

本来性得点のパターンにより、分類を行ったところ、“本来性全面高群”は他者指向的反応、想像

性、視点取得の得点が他の群と比較して高く、被影響性および自己指向的反応が低いことが分かった。本来性の要素がすべて高い人は、他者の立場や架空の人物の感情や行動・心理的観点を認知し、他者の感情に対して共感的な配慮を示し、また素質的に他者の感情に巻き込まれ難く、他者の感情に対して不安や苦痛を感じる経験が少ないことが明らかになった。つまり、本来性の高い人は、相手の心理的状況を認知的なアプローチによって理解し、対象に共感的配慮行動で応答しているといえるだろう。

さらに、本来性の特定の要素のみが高い群に特徴的な共感性との関連も見出すことができた。“気持ちにあった行動をせず、歪みのない処理をする群”は、行動レベルでは、「本当は楽しくないのに、楽しいふりをすることがよくある」「他人をがっかりさせないために、自分がしたくないことをすることがよくある」など気持ちとは異なる反応を見せる一方で、「自分に対する不快な感情は、できるだけ見ないようにしている」といった行動はとらない。このことから、自分の気持ちに気づくことができるが、自分の気持ちに合わせるより周囲に合わせた行動を取ることが想定できる。この群の共感性尺度の得点は、本来性全面高群との間に有意な差は見られなかったものの、他群に比べ平均値は高い。また、共感性尺度の下位尺度でも、同様の傾向が伺われる。つまり、気質的に他者の心理状態に巻き込まれやすく、また、他者の心理状態に対し、認知的・情動的に応答していることが伺われる。

“関係得点が低く、気持ちにあった行動をする群”の共感性得点は、下位尺度も含め、全体的に比較的低い結果となり、他者の心理状態への情動的・認知的な応答はやや少なく、他者との親密な関係を構築することより、自分の気持ちに正直に行動することを優先している可能性が伺われた。伊藤（2010）の指摘する「自分らしさへのこだわりによって共感性が失われる可能性」がある群で

あると言えるのではないか。

“歪みのある処理群”は、被影響性と自己指向的反応が他群に比してやや高く、視点取得がやや低い結果となった。他者の心理的状态に気質的に影響を受けやすく、個人的な苦痛を感じやすい傾向がみられる一方で、相手の立場から他者を理解しようとする認知傾向は低いことが示唆される。

日本における本来性の研究は、本来性の感覚面から捉えた本来感を中心に発展してきた。本研究の目的は、本来性について、これまで多くなされていた本来感と様々な概念との関連の検討にとどまらず、行動的側面からもアプローチを加えることであった。行動的側面も加えて本来性パターンを分類し、共感性の高低という点での関連について明らかにすることができた。本来性を多角的に検討するための視点を提供することができたと考えられる。

文 献

藤元慎太郎 (2014). 本来性尺度の信頼性・妥当性の検討. 日本心理学会第 78 回大会発表論文集, 337.

藤元慎太郎・吉良安之 (2014). 青年期における過剰適応と自尊感情の研究. 九州大学心理学研究, 15, 19-28.

伊藤正哉・堀毛一也 (編). (2010). 本来性研究の発展とポジティブ心理学. 現代のエスプリ ポジティブ心理学の展望. 至文堂, 100-108.

伊藤正哉・阿部美帆 (2007). 本来性 (Authenticity) の行動的側面と感覚的側面の関連—自尊感情の再概念化に関する比較文化的検討のための予備調査 1—. 日本心理学会第 71 回大会発表論文集, 61.

伊藤正哉・小玉正博 (2005a). 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が Well-being に及ぼす影響の検討. 教育心理学研究, 53(1), 74-85.

伊藤正哉・小玉正博 (2005b). 自分らしくある感覚 (本来感) とストレス反応、およびその対処行動との関係. 健康心理学研究, 18(1), 24-34.

岩切政和 (2003). ハイデガーの「本来的実存」と人間福祉の問題. 久留米大学文学部紀要社会福祉学科編, 3.

Kernis, M. H. (2003). Toward a conceptualization of optimal self-esteem. Psychological Inquiry, 14(1), 1-26.

仲正昌樹 (2015). ハイデガー哲学入門『存在と時間』を読む. 講談社現代新書.

鈴木有美・木野和代 (2008). 多次元共感性尺度 (MES) の作成—自己思考・他者思考の弁別に焦点を当てて—. 教育心理学研究, 56(4), 487-497.

高田利武 (1999). 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程—比較文化的・横断的資料による実証的検証—. 教育心理学研究, 47(4), 480-489.

氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・中山康裕 (編). (2004). 心理臨床大辞典. 培風館.

謝 辞

本研究は、いわき明星大学大学院人文学研究科平成 27 年度修士論文として提出したものの一部に加筆修正を加えたものです。本研究遂行にあたり、ご指導くださった先生方、並びに調査にご参加くださった甲南女子大学、いわき明星大学、いわき明星大学大学院人文学研究科臨床心理学専攻の皆様、改めて心よりお礼申し上げます。